

# 19世紀前半のロンドンにおける 民衆教育に関する一考察

依 光 正 哲

## I

『一橋研究』第17号において、筆者は1830年代後半のマンチェスター近郊のベンドゥルトンにおける民衆教育の状態を論述した<sup>(1)</sup>。本稿はその続篇をなし、ロンドンのウェストミンスターにおける民衆児童教育の状態を明らかにせんとするものである。

具体的な論述にはいる前に、三好信浩氏の労作『イギリス公教育の歴史的構造』（画紀書房、昭和43年）をとりあげることによって問題の所在を示しておこう。

三好氏はイギリス公教育制度成立の起点を1830～40年代に求めた。まずイギリス教育の伝統たるボランティアイズムの歴史的考察を行ない、次に国家関与の萌芽として初期救貧法と初期工場法をあげ、公教育との関連は後者の方がより緊密であり、「工場法から公教育へ」の発展を辿ることを指摘する。そして、イギリスでは公教育制度の樹立が大陸諸国、とりわけプロテスタント系諸国に比して遅滞していることを指摘すると共に、その原因をイギリスにおける宗教改革の曖昧さと国教派・非国教派の対立の熾烈さに求めた。このイギリス公教育制度成立の遅滞を変革する理論と行動は、一方において選挙法改正と、他方においてチャーティスト運動と不可分の関係にあった。そして、新選挙法の下で、教育への国庫助成金が創設され、1833年工場法が成立し、1834年には新救貧法が成立し、さらに1839年には枢密院教育委員会が設立され、普遍的教育は思想の段階から政策の段階へと発展した。1830～40年代にイギリス公教育の歴史的起点を求める所以である。しかも、三好氏は<sup>(2)</sup> Kay-Shuttleworth に焦点を合わせることに、この起点が何よりも「政治的必要性」

(1) 拙稿「1830年代後半のマンチェスター近郊における民衆教育の状態について」『一橋研究』第17号。

(2) Kay-Shuttleworth の基本的な姿勢を三好氏は次のように要約している。「犯罪と叛乱を抜本塞源的に除去し、社会の公的な秩序の維持をはかる『政治的必要性』から、貧民を、『無知、いな、野蛮』から解放しなければならない、そのためには民衆教育という手段しか残されていないし、その民衆教育を慈善事業に委ねたのではいつまでたっても解決にな

からもたらされたことを論証している。

「国家の教育関与に先行する時期において、民衆教育を組織し支配」<sup>(3)</sup>していたのはボランティア方式であり、このボランティア方式による民衆教育の現実をいかに克服するかが公教育制度立にとって決定的に重要となる。従って、三好氏の労作がボランタリズムの分析から始まるのは当然のこととも言えよう。問題は三好氏が考えておられるボランタリズムの内容である。三好氏は、尾形利雄氏と佐伯正一氏<sup>(4)</sup>がイギリス民衆教育の主要な構成部分としてとりあげられた私営の各種の学校を無視して、慈善学校、日曜学校、助教生方式 (monitorial system) がボランタリズムの教育を構成すると考えておられる<sup>(5)</sup>。たしかに、ボランタリズムのなかで、日曜学校、慈善学校、助教生方式による民衆教育の普及活動<sup>(6)</sup>、学校の設立・運営に関する中央組織をもっていたことから重要な地位を占めている<sup>(7)</sup>。

だが、ボランタリズムのなかには、それを統轄する組織をもたず全く自然発生的に設立され、いつの間にか消滅していった私営の学校 (private schools) も数多く存在し、またそこに在籍する生徒数も多かった。そして、私営の学校を支えていたのは「親と子どもの教育に対する欲求」<sup>(8)</sup>であったと考えられ、しかもこの欲求の根底には「貧困な大衆の急進的な社会変革への願望」<sup>(9)</sup>が存在していたと考えられる。イギリス公教育制度成立の遅滞を变革する運動の一端を担うチャーティズムとも連繫すると考えられる私営学校は、イギリス公教育研究にとって重要な出発点とも言えよう。従って、イギリス民衆教育を問題にす

らないため、国家が関与しなければならぬ」(三好信浩『イギリス公教育の歴史的構造』、亜紀書房、昭和43年、p. 206)。

(3) 三好信浩、同上、p. 19。

(4) 尾形利雄『産業革命期におけるイギリス民衆児童教育の研究』、校倉書房、昭和39年。

(5) 佐伯正一『民衆教育の発展——産業革命期イギリスにおけるその実態と問題点に関する研究——』、高陵社書店、昭和42年。

(6) 三好信浩、前掲書、pp. 20～30。この見解は、荏司雅子編『現代西洋教育史』、亜紀書房、昭和44年、においてもみられる。なお助教生方式については、佐伯正一、前掲書、pp. 66～77を参照。

(7) 1833年から民衆教育に対する国庫助成がはじまるのであるが、国庫助成金の交付申請をなす団体は国民協会 (National Society for Promoting the Education of the Principles of the Established Church throughout England and Wales) と内外学校協会 (British and Foreign School Society) の二つの協会であり、この点からも中央統轄機関と結びついた学校が重要となる (三好信浩、前掲書、p. 129参照)。

(8) M. G. Jones, *The Charity School Movement, A Study of Eighteenth Century Puritanism in Action*, Cambridge U. P., 1938, p. 149.

(9) 成田克矢『イギリス教育政策史研究』、御茶の水書房、昭和41年、p. 47。

(10) 本稿はボランタリズムの教育現実をできるだけ史実に即して叙述するにとどまる。ボランタリズムの超克と公教育に関する議論との連関についての考証は他日を期したい。

る場合、私営学校をとりあげねばならないと筆者は考える。<sup>(11)</sup>

## II

ロンドン統計協会 (Statistical Society of London) は 1837 年から 38 年にかけてロンドンのウェストミンスターにおける教育状況を調査し、その結果を三つの報告書に発表した。<sup>(12)</sup> 三つの報告書はそれぞれ調査範囲を異にし、三つの報告書全部をつきあわせることによってウェストミンスター全体の教育状態を把握することができる。<sup>(13)</sup>

まず調査の具体的方法を示そう。第一報告書によれば、ロンドン統計協会の評議会の決定にしがたって、ロンドンの諸教区の一部における教育の状態を調査する委員会が 1837 年 7 月 3 日に設置された。調査委員会は調査員を雇い、調査員は調査に先立って学校のみならず町内の様相をあらかじめ下検分した。次に、調査員が学校を訪れ調査委員会が用意した質問項目について、その学校の教師と生徒から (主として教師から) 回答を得た。このようにして得られた調査結果の信憑性を確かめるため、調査委員会自体が任意抽出された学校を訪れ再調査を行ない、調査員の集計した資料と調査委員会のを比較検討した。<sup>(14)</sup> 調査委員会は調査員の集計資料が信頼しうるものであることを確認した。

三つの報告書は、各種の学校の学校数と生徒数、生徒の年齢構成、授業料、授業科目、

---

(11) 三好氏は「ボランティアイズムの背後にある自由の論理は、大別すれば次の三つの論理から成っていた。その一は、私人や宗教団体のもつ学校の設置および管理の自由と、それらの私立学校への入学を選択する自由であり、その二は、かかる私立学校における規律および教授の自由、とりわけ宗教教授に関する自由であった」(三好信浩, 前掲書, p. 332) とのべられる。このことは、私営学校を排除する理由にはならず、むしろ、ボランティアイズムの範囲は私営学校と慈恵主義の学校の双方を含めたものであることの有力な根拠となるものと思われる。

(12) *First Report of a Committee of the Statistical Society of London on the State of Education in Westminster, 1837*, London, 1838. (*First Report*, 第一報告書と略す); *Second Report of a Committee of the Statistical Society of London, appointed to enquire into the State of Education in Westminster*, in *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. 1 (August, 1838), (*Second Report*, 第二報告書と略す); *Third Report of a Committee of the Statistical Society of London appointed to enquire into the State of Education in Westminster*, in *Journal of Statistical Society of London*, Vol. 1 (December, 1838). (*Third Report*, 第三報告書と略す)。

(13) それぞれの報告書の調査範囲は、第一報告書が St. Martin's-in-the Fields; St. Clement Danes; St. Mary-le-Strand; St. Paul's, Covent Garden; The Savoy の五教区 (第 I 地区と略す)、第二報告書が St. John; St. Margaret の二教区 (第 II 地区と略す)、第三報告書が St. George; St. James; St. Anne Soho の三教区 (第 III 地区と略す) であった。

(14) *First Report*, pp. 3~4.

第1表 Westminsterの人口(1831)

| 教 区                |                            | 人 口     |
|--------------------|----------------------------|---------|
| 第<br>I<br>地<br>区   | St. Martin's-in-the-Fields | 23,732  |
|                    | St. Clement Danes          | 11,578  |
|                    | St. Mary-le-Strand         | 2,052   |
|                    | St. Paul's, Covent Garden  | 5,203   |
|                    | The Savoy                  | 431     |
| (a)                |                            | 42,996  |
| 第<br>II<br>地<br>区  | St. John                   | 22,648  |
|                    | St. Margaret               | 25,344  |
| (b)                |                            | 47,992  |
| 第<br>III<br>地<br>区 | St. George                 | 58,209  |
|                    | St. James                  | 37,053  |
|                    | St. Anne Soho              | 15,600  |
|                    | (c)                        |         |
| 合 計                |                            | 201,850 |

(a) *First Report*, p. 3.

(b) *Second Report*, p. 193.

(c) *Third Report*, p. 449.

ウェストミンスター<sup>(15)</sup>の1837年現在の学校数と生徒数を示したのが第2表であり、この生徒を年齢別に示したのが第3表である。第3表から、5~15歳の児童のうち就学している児童はウェストミンスター全体で36%となっていることがわかる。

就学児童がどのような種類の学校に属していたのかを示したのが第4表である。まず、週日学校と日曜学校に大きく分けて考えてみよう。週日学校あるいは夜間学校のみ<sup>(16)</sup>に在籍する生徒数は13,095人、日曜学校のみに在籍する生徒数は2,200人、日曜学校と週日学校との双方に在籍する生徒数4,067人となっており、生徒総数に占める割合はそれぞれ

(15) *First Report*, p. 5; *Third Report*, p. 453.

(16) 問題は1831年から37年までの間に人口の変動があったか否かということである。第三報告書は第III地区の人口に変化がなかったと述べているが(*Third Report*, p. 449)、第二報告書は、第II地区における1821年から1831年までの人口増加率を31年から37年までにあてはめ、1831年に47,992人だった人口が54,131人に増加したと推定している(*Second Report*, p. 193.)。いずれにしても、ウェストミンスターの人口は20万人を少し越える程度であったと思われる。

(17) *First Report*, p. 6; *Second Report*, p. 193; *Third Report*, p. 454.

(18) 一人の児童が複数の学校に在籍していてもその生徒は一名と数えるが、一つの建物で複数の学校が営まれている場合、複数の学校として数える。

授業方法、各種の学校の所蔵する図書、教員数と教員の経験年数、などを統計的に示すと同時に、各種の学校の特徴を記述している。

調査委員会の仕事が人口の把握と就業状態の調査からはじめられていたならば、この調査はきわめて価値あるものになったであろう。報告書は、正確な人口数と就学児童数とその比率をだせなかったことを反省している。<sup>(15)</sup>しかし、約20万人に達する住民数を正確に把握することは、それだけでも大きな調査となり、今回の調査委員会には手に負えない仕事であった。そこで、三つの報告書は1831年の人口統計を採用し(第1表)、人口の概数をつかみ、<sup>(16)</sup>また、1837年現在の5歳~15歳<sup>(17)</sup>の児童数を40,716人と推定した。<sup>(18)</sup>

第 2 表 Westminster の地区別学校数と生徒数 (1837 年)

| 教 区                |                            | 学 校 数 | 生 徒 数   |
|--------------------|----------------------------|-------|---------|
| 第<br>I<br>地<br>区   | St. Martin's-in-the-Fields | 49    | 2, 131  |
|                    | St. Clement Danes          | 34    | 1, 116  |
|                    | St. Mary-le-Strand         | 11    | 478     |
|                    | St. Paul's Covent Garden   | 20    | 999     |
|                    | The Savoy                  | 2     | 46      |
|                    | ④                          | * 126 | 4, 770  |
| 第<br>II<br>地<br>区  | St. John                   | 87    | 2, 759  |
|                    | St. Margaret               | 98    | 3, 024  |
|                    | ⑤                          | 185   | 5, 783  |
| 第<br>III<br>地<br>区 | St. George                 | 133   | 3, 904  |
|                    | St. James                  | 61    | 3, 474  |
|                    | St. Anne Soho              | 35    | 1, 431  |
|                    | ⑥                          | 229   | 8, 809  |
| 合 計                |                            | 540   | 19, 362 |

④ *First Report* p. 8.

⑤ *Second Report* p. 194.

⑥ *Third Report* pp. 450~451.

\* 学校数 116 校には evening schools 10 校が含まれていないので、  
小計で  $116+10=126$  と示した。

第 3 表 年 齢 別 生 徒 数

|           | 5 歳未満  | 5~15 歳  | 15 歳以上 | 不 明 | 計       |
|-----------|--------|---------|--------|-----|---------|
| 第 I 地 区   | 946    | 3, 476  | 116    | 232 | 4, 770  |
| 第 II 地 区  | 1, 081 | 4, 626  | 76     | 0   | 5, 783  |
| 第 III 地 区 | 1, 650 | 6, 713  | 446    | 0   | 8, 809  |
|           | 3, 677 | 14, 815 | 638    | 232 | 19, 362 |

*First Report*, p. 9; *Second Report*, p. 215; *Third Report*, p. 468.

67.6%, 11.4%, 21.0% となる。他の地域における同様な比率を示したのが第 5 表であるが、この表と比較して、ウェストンミンスターでは日曜学校のみ在籍する児童の割合がきわめて少ないことに気づく。日曜学校のみ生徒の割合が少ないほどその地域の教育状態は良好だと言えるので、ウェストンミンスターは他の地域よりも相対的に良い民衆教育を行っていたといえよう。

週日学校には授業料を徴収する「私営学校」と慈恵主義の学校の二種類があり、ウェス

第4表 学校別の学校数・生徒数・教員数

|  | ①<br>学校数 | ①<br>生徒数 | ②<br>5歳<br>未満 | ②<br>5~15<br>歳 | ①<br>15歳<br>以上 | ②<br>教員数 |
|--|----------|----------|---------------|----------------|----------------|----------|
| 日曜学校                                   |          |          |               |                |                |          |
| 国教会                                    | 14       | 2,115    | 141           | 1,769          | 205            | 180      |
| 非国教会                                   | 26       | 4,152    | 572           | 3,447          | 133            | 453      |
| 小計                                     | 40       | 6,267    | 713           | 5,216          | 338            | 633      |
| {週日学校か夜間学校にも<br>{在籍するもの                |          | 4,067    |               |                |                |          |
| 日曜学校のみ                                 |          | 2,200    |               |                |                |          |
| 週日学校                                   |          |          |               |                |                |          |
| Dame Schools                           | 130      | 1,820    | 805           | 1,015          | 0              | 136      |
| Common Day Schools                     | 129      | 2,923    | 704           | 2,200          | 19             | 159      |
| Middling Schools                       | 95       | 2,783    | 239           | 2,484          | 60             | 153      |
| Superior Schools                       | 35       | 1,371    | 56            | 1,145          | 170            | 85       |
| {Charity Schools の生徒だが授<br>{業料を払っているもの |          | 82       | 0             | 82             | 0              |          |
| 授業料だけで支えられている学校                        | 389      | 8,979    | 1,804         | 6,926          | 249            | 533      |
| Infant Schools                         | 17       | 2,273    | 1,450         | 823            | 0              | 27       |
| Charity Schools                        | 55       | 5,606    | 185           | 5,231          | 190            | 71       |
| 慈善によって支えられている学校                        | 72       | 7,879    | 1,635         | 6,054          | 190            | 98       |
| 小計                                     | 460      | 16,858   | 3,439         | 12,980         | 439            | 631      |
| 夜間学校                                   | 38       | 307      | 3             | 260            | 44             |          |
| 週日学校にも在籍するもの                           |          | 3        | 0             | 3              | 0              |          |
| 夜間学校のみ                                 |          | 304      | 3             | 257            | 44             |          |
|  | *539     | 19,326   |               |                |                |          |

① First Report, pp. 76-77; Second Report, p. 215; Third Report, p. 468.

② First Report, p. 55; Second Report, p. 204; Third Report, p. 459.

\* 第2表の学校総数540校と不整合なのは、第I地区の学校総数を教区別に示したとき126校であったのが同地区の学校を各種の学校に分類して合計したときに125校となっているため、第4表の学校総数が539校となった。

トミンスターでは、前者に籍をおく生徒数の方が後者に籍をおく生徒数よりも多い。また、週日学校数のうち15%を占めるにすぎない慈善主義の学校が、週日学校生徒数の約47%をも占めている。このことは、幼児学校、慈善学校の一枚当りの生徒数が「私営学校」の一枚当たりの生徒数よりもはるかに多いことを示している。しかも、慈善主義の学校の教員は98名で、週日学校の教員数631名のうちの15.5%を占めるにすぎない。本稿第4節

第 5 表 各 地 の 就 学 状 況

|                           | Manchester<br>and Salford | Bury in<br>1835   | Liverpool*<br>in<br>1835~6 | York in<br>1836   | Birming-<br>ham in<br>1838 | Pendleton †<br>in<br>1838 |
|---------------------------|---------------------------|-------------------|----------------------------|-------------------|----------------------------|---------------------------|
| 週日学校あるいは<br>夜間学校のみ        | 13, 239<br>(23. 6)        | 1, 503<br>(26. 2) | 17, 815<br>(53. 7)         | 2, 228<br>(39. 8) | 10, 902<br>(39. 4)         | 518<br>(19. 9)            |
| 週日学校あるいは<br>夜間学校と日曜学<br>校 | 13, 421<br>(23. 9)        | 1, 122<br>(19. 6) | 11, 649<br>(35. 1)         | 2, 521<br>(45. 1) | 4, 141<br>(15. 0)          | 680<br>(26. 2)            |
| 日曜学校のみ                    | 29, 529<br>(52. 5)        | 3, 102<br>(54. 2) | 3, 719<br>(11. 2)          | 842<br>(15. 1)    | 12, 616<br>(45. 6)         | 1, 402<br>(53. 9)         |
|                           | 56, 189<br>(100)          | 5, 727<br>(100)   | 33, 183<br>(100)           | 5, 591<br>(100)   | 27, 659<br>(100)           | 2, 600<br>(100)           |

*Report on the State of Education in Birmingham, in Journal of the Statistical Society of London, Vol. 3 (April, 1840), p. 28.*

\* Liverpool の調査が行なわれていた時には、「はしか」「天然痘」「発疹チフス」「しょう紅熱」などが流行していたときであり (*Ibid.*, p. 29) 必ずしも正常な状態を示したものとは言えない。

† *Report of a Committee of Manchester Statistical Society, on the State of Education in the Township of Pendleton, 1838, in Journal of the Statistical Society of London, Vol. 2 (March, 1939), p. 75.*

に示されている如く、慈恵主義の週日学校の大部分では助教生方式が採用されてはいるが、われわれは慈恵主義の学校における教育水準の低さを容易に想像し得るのである。ボランティアを問題にする場合、私営学校を無視することができないことは、以上の諸点からも明らかになったであろう。

### III

ウェストミンスターでは週日学校が Dame Schools, Common Day Schools, Middling Schools, Superior Schools, Evening Schools, Infant Schools, Charity Schools, に分類されている。前者五校は授業料を徴収することを目的とした私営学校であるが、後者二校は無料教育を行なう慈恵主義の学校であり、日曜学校も慈恵主義の学校のなかに入れることができる。本節では各種の私営学校の様相を具体的に明らかにし、慈恵主義の学校に関することは次節で論述したい。

#### Dame Schools

この学校は、貧しい婦人が生活の資を得るために、あるいは乏しい主収入を補助する<sup>(19)</sup>ために、若干の授業料を生徒から徴収して教育を行なうために開設したものである。洗たく

(19) 教師たる婦人の年齢・境遇はさまざまであり、年老いた婦人であることも、病気その

や裁縫などの作業をしながら、あるいは小売商を営みながら、児童に読み・書き・裁縫・道徳・宗教などを教えていたのである。<sup>(20)</sup><sup>(21)</sup>

授業料は学校によって週2ペンスから1シリングの幅があったが、多くは4~6ペンスであった。<sup>(22)</sup> 授業時間は朝9時~12時、午後2時~5時の6時間が一般的であり、水曜日と土曜日は午前中だけだった。<sup>(23)</sup> だが、学校とは名ばかりで、教室だけの用途にあてられた部屋はほとんどなく、また生徒の遊び場もない状態であった。<sup>(24)</sup><sup>(25)</sup>

この種の学校はウェストミンスターでは130校を数え、生徒数は1,820人であった。生徒のうち5歳未満の者が805人、5~15歳の者は1,015人となっており(第4表参照)、生徒の平均年齢は7~8歳程度であった。一校当りの生徒数は15人前後であり、いわば少人数制の教育が実施されたわけであるが、上記のような状態の教育であるために、教育の量も質も粗末なものとならざるを得なかった。この学校は両親が働いている間、児童をあずかり、その世話をしていた程度のものであった。<sup>(26)</sup>

### Common Day Schools

この学校には男子校・女子校・男女共学校があり、男子校の教師は男性、その他の学校は女性の教師が主だった。<sup>(27)</sup> この学校の教師で自ら進んでこの職業を選んだものは少なかったが、他の職業とのかけもちをしている者はほんの僅かで、教師になるための教育を受けた者が約半分ほどいた。<sup>(28)</sup>

---

他の理由で定職につけない若い婦人であることもあった。ただし、自ら進んでこの Dame Schools の教師をしている者は少なかった (*First Report*, p. 12; *Third Report*, p. 452)。

この学校の設立は全く自然発生的だった。そもその起源は14世紀に遡るといわれているが(尾形利雄, 前掲書, pp. 49~50)、ウェストミンスターでは1820年以前から存続している学校は130校のうち7校にすぎない (*First Report*, p. 12; *Second Report*, p. 205; *Third Report*, p. 459)。

- (20) *First Report*, p. 13. 教師としての特別の教育をうけたものはほとんどいなかった (*Ibid.*)。
- (21) 少数の学校では算数・文法・地理・歴史なども教えられた (*First Report*, p. 59; *Second Report*, p. 207; *Third Report*, p. 462.)。
- (22) *First Report*, p. 13; *Second Report*, p. 195; *Third Report*, p. 451. 学校の諸経費はすべて授業料によって賄われたが、児童からの授業料の徴収がうまくいったか否かは全く別の問題である (*First Report*, p. 14)。
- (23) *First Report*, p. 15; *Second Report*, p. 195.
- (24) *Second Report*, p. 196. 教師の居間が教室として利用される場合が多かった (*Third Report*, p. 452.)。
- (25) *First Report*, p. 15.
- (26) *Ibid.*, p. 16; *Third Report*, p. 451.
- (27) *Third Report*, p. 452.
- (28) *Second Report*, p. 207; *Third Report*, p. 463.

この学校では、*Dame Schools* の主要教科たる読み方と裁縫に加えて、書き方・算数・文法の初歩などが主として教えられ、<sup>(29)</sup>地理や歴史を教える学校教は *Dame Schools* の場合よりもはるかに多くなっている。<sup>(30)</sup> 授業料は、毎週取める方法と三カ月に一度取める方法の二つがあったが、前者の方法をとる者が生徒数の70%を占め、週に平均9ペンスであった。<sup>(31)</sup>

生徒数は、2,923人であるが、その内訳は、5歳未満の者704人、5～15歳の者2,200人、15歳以上の者19人となっており（第4表参照）、生徒の年齢構成は *Dame Schools* の場合よりも高くなっている。また、教室の状態や生徒のみだしなみ、その他に関して、マンチェスターの *Common Day Schools* のそれよりも良好である、と報告書はのべている。<sup>(32)</sup> だが、生徒の在学期間を考え合わせると、この学校の生徒は各教科についての不完全な知識しか習得しえなかったものと思われる。<sup>(33)</sup>

### Middling Schools

ボランティア方式による民衆教育を考える場合、私営学校が重要な構成部分であることは既にのべた。この私営学校を扱う場合、*Dame Schools*, *Common Day Schools*, *Superior Schools* の三種類に分けて考察するのが一般である。ところが、ロンドン統計協会の調査委員会は、*Common Day Schools* よりは良好であるが *Superior Schools* と呼ぶには見劣りする学校を *Middling Schools* という項目にまとめている。<sup>(34)</sup>

この学校の生徒は授業料を三カ月に一度、平均20シリング支払った。<sup>(36)</sup> 男子校は29校、女子校は66校あり、生徒数は2,783人だった。生徒の内訳は、5歳未満の者239人、5～15歳の者2,494人、15歳以上の者60人となっており（第4表参照）、5～15歳の生徒が圧倒的に多く、*Common Day Schools* の生徒よりも平均年齢が高くなっている。生徒は主として商人や事務所の職員の子弟であったといわれている。<sup>(37)</sup>

この学校ではクラス編成が行なわれ、学校数が95校であるのに対し、教員は153人を数

(29) *First Report*, p. 16; *Third Report*, p. 452.

(30) *First Report*, p. 19.

(31) *Ibid.*, p. 57; *Second Report*, p. 206; *Third Report*, p. 461.

(32) *First Report*, p. 17.

(33) *Ibid.*, p. 20.

(34) たとえば、*Report of a Committee of the Manchester statistical Society, on the state of Education in Township of Pendleton, 1838*, in *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. 2, (March, 1839), p. 75 の分類をみよ。

(35) *First Report*, pp. 21～22. ただし、この分類はあくまでも相対的なものである (*Ibid.*, p. 22)。第三報告書では、*Common Day Schools* と *middling Schools* が一括されている (*Third Report*, p. 452)。

(36) *First Report*, p. 57; *Second Report*, p. 206; *Third Report*, p. 461.

(37) *Second Report*, p. 198.

え、一つの学校に複数の教員がいる学校が多いことがわかる。ほとんどの学校で文法や地理が教えられ、歴史も教えられた。教室は清潔で、換気もよく行なわれ、生徒はみな従順であったと第一報告書はのべている。何よりも重要なことは、この学校では教師およびその家族が生活の場として利用する部屋ではなしに、教室のみに使用される部屋を確保していたことである。そして、生徒の通学期間は2～4年が一般的であった。

### Superior Schols

この学校は、男子校が12校、女子校が22校あり、生徒数1,371人、教員数85人を擁し(第4表参照)、しかも教員の資質は民衆教育機関のうち最高であるといわれている。生徒は主として専門職に携わる者の子弟であり、授業料は、受ける科目の数によって差が生じてくるのであるが、三カ月に15～63シリングの幅があり、平均すると33シリング5ペンスであった。授業はクラス編成がとられ、個人教授もおりまぜて行なわれていた。3R'sと宗教・道徳は勿論のこと、文法、地理、歴史などがほとんどの生徒に教えられ、外国語の授業も約半数の生徒に教えられていた。生徒の在学期間は普通4年間であった。このようにして、週日学校のうちで最も教育水準の高いのは Superior Schools であった。

### Evening Schols

この学校は38校を数えるが、そのうち37校までが Common Day Schools の教師によって経営され、授業時間は午後6時から8時までの2時間だった。3R'sのほか、文法、地理などがすべての学校で教えられ、歴史、製図、幾何、測量などが半数の学校で教えられ

(38) *First Report*, p. 22; *Second Report*, p. 198; *Third Report* p. 462.

(39) *First Report*, p. 22.

(40) *Second Report*, p. 199.

(41) *Ibid.*, p. 198.

(42) 教師になるための教育を受け、他の職業にもつかず、児童の教育のみに携わるものが多かった (*First Report*, p. 24; *Second Report*, p. 200.)

(43) *Second Report*, p. 199.

(44) *First Report*, p. 57; *Second Report*, p. 206; *Third Report*, p. 461.

(45) *First Report*, p. 23.

(46) 授業科目とそれを受講する生徒を示すと次表のようになる。

| 科 目                         | 読 み | 書 き | 算 数 | 裁 縫 | 編 物 | 文 法 | 地 理 | 歴 史 | 製 図 | 古 典 | 幾 何 | 測 量 | 仏 語 | 道 徳<br>宗 教 |
|-----------------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------------|
| 第Ⅱ地区 <sup>Ⓐ</sup><br>(81人)  | 81  | 81  | 65  | 7   |     | 61  | 67  | 63  | 7   | 10  | 4   | 6   | 23  | 81         |
| 第Ⅲ地区 <sup>Ⓑ</sup><br>(758人) | 758 | 719 | 738 | 321 |     | 724 | 649 | 473 | 107 | 18  | 54  | 51  | 372 | 758        |

Ⓐ *Second Report*, p. 200.    Ⓑ *Third Report*, p. 462.

(47) *Second Report*, p. 199.

(48) *First Report*, p. 24; *Second Report*, p. 200; *Third Report*, p. 459.

(49) *First Report*, p. 24; *Second Report*, p. 200.

(50) た。授業料は週に6ペンスから1シリングの幅があった。(51)

生徒総数が304人にすぎず、1校当りの生徒数は8人前後であり、個人教授に近く、教育の水準は高かったと第一報告書はのべている。この学校は昼間働いている者に開放された学校だと思われるが、三つの報告書はこの点に関して何も語っていない。(52)(53)

IV

本節でとりあげる三種類の学校は前節で扱った各種の学校とは性格を異にする。いわゆる慈恵主義の学校に属し、授業料収入を直接目的としない民衆教育機関がこれである。

Infant Schools

この学校はその経費を主として自発的な寄付によって賄い、生徒からは週に1~2ペンスを集めて教育を行なっていた。学校数は17校にすぎないが、生徒数は2,273人にのぼり、そのうち5歳未満の者が1,450人、5歳以上の者が823人という構成になっている。(54)

授業には助教生方式とクラス編成とが採用され、3R's と宗教・道徳のほか、文法、地理などが教えられた。しかし、生徒の年齢や出席状態や在学期間などを考え合わせると、教育の内容は Dame Schools と同じようなものであったと推定される。(55)

この学校の多くは1830年以降に設立されたものである。(58)

(50) *First Report*, pp. 24~25.

(51) *Second Report*, p. 200.

(52) *First Report*, p. 25.

(53) この学校では、生徒のうち15歳以上の者の占める割合が各種の学校と比較すると最も高く、このことはこの学校が就業者にも開放された学校であることを暗示していると思われる。

(54) *First Report*, p. 26; *Second Report*, p. 202; *Third Report*, p. 460.

(55) Infant Schools と Charity Schools で助教生方式を採用している学校数を示したのが次表である。

| 地 区        |       | Infant Schools |    |     |    | Charity Schools |    |     |    |
|------------|-------|----------------|----|-----|----|-----------------|----|-----|----|
|            |       | I              | II | III | 計  | I               | II | III | 計  |
| 学 校 数      |       | 5              | 6  | 6   | 17 | 14              | 23 | 18  | 55 |
| 助教生<br>方式を | 採 用   | 5              | 6  | 6   | 17 | 8               | 18 | 18  | 44 |
|            | 不 採 用 | 0              | 0  | 0   | 0  | 6               | 5  | 0   | 11 |

*First Report*, p. 60; *Second Report*, p. 207; *Third Report*, p. 462.

(56) *First Report*, p. 59; *Second Report*, p. 207.

(57) *First Report*, p. 27.

(58) *Ibid.*, p. 25; *Second Report*, p. 205; *Third Report*, p. 459. この学校はR・オーエンが設立した「性格形式学院」に源を発している(S. J. Curtis, *History of Education in Great Britain*, 7th edn, London, 1967, pp. 209~213 参照)。

### Charity Schools

この種の学校の起源は遠く1699年に遡るが<sup>(59)</sup>、ウェストミンスターでは1839年現在、55校存在しているもののうち1820年以前に設立された学校は22校もあり、17世紀に設立されたものすらある<sup>(61)</sup>。Charity Schoolsは生徒から若干の授業料を徴収するのであるが、財政的には国民協会、内外学校協会などによって支えられている<sup>(62)</sup>。児童の両親の経済状況によっては授業料を払う必要がなく、制服を支給することもあった<sup>(63)</sup>。

55校を数えるこの学校は5,606人の生徒を教育していたが、3R'sと宗教・道徳が教育の主要な内容をなしていた<sup>(64)</sup>。ここでも、大多数の生徒は短期間しか在学せず<sup>(65)</sup>、たとえ教師の経験が豊かであったとしても、その教育効果はあまり期待できなかった。Charity Schoolsのうち、教区の教会の募金によって運営されているものを教区学校(parochial schools)とよび、国民協会、内外学校協会と結びついている学校をそれぞれ国民学校(National schools)、内外学校(British and Foreign schools)と呼んでいた<sup>(67)</sup>。児童の親の状態から判断すると、内外学校はDame Schoolsのすぐ上に位置するが、国民学校は最低であるといわれている<sup>(68)</sup>。

### Sunday Schools

日曜日に生徒を集めて3R'sの基礎を教え、宗教教育を施すことによって街頭にあふれている貧困児童を救済することを目的として、1780年以降の日曜学校が全国的に急速に設立されていった<sup>(69)</sup>。ウェストミンスターには、40校の日曜学校があり、その設立年代は、1820年以前のもので15校、1820～30年の間のもの8校、1830年以降のもの17校となっており<sup>(70)</sup>。

ところが、日曜学校において国教会対非国教会の対立・抗争が顕著にあらわれた<sup>(71)</sup>。ウェストミンスターでの両派の勢力分布は、非国教派の日曜学校が26校、生徒数4,152人に対し、国教派の日曜学校は14校、生徒数2,115人となっており(第4表参照)、非国教派が

(59) M. G. Jones, *op. cit.*, p. 19; 三好信浩, 前掲書, pp. 20～23.

(60) *First Report*, pp. 73～74; *Second Report*, p. 205; *Third Report*, p. 459.

(61) *First Report* p. 29.

(62) *Third Report*, p. 453.

(63) *First Report*, p. 56; *Second Report*, p. 205; *Third Report*, p. 460.

(64) *First Report*, p. 29; *Second Report*, p. 201.

(65) *Second Report*, p. 201.

(66) *Ibid.*, p. 202.

(67) *Third Report*, p. 453.

(68) *Ibid.*, p. 455.

(69) S. J. Curtis, *op. cit.*, pp. 197～198.

(70) *First Report*, p. 68; *Second Report*, p. 213; *Third Report*, p. 465.

(71) 三好信浩, 前掲書, pp. 24～25. 日曜学校は各教派が財政的にこれを支援していたので、生徒は全く授業料を払わなかった(*First Report*, p. 27.)。

日曜学校の3分の2を占めていることになる。

日曜学校の生徒のうち、日曜学校のみ生徒は3分の1を占めるにすぎず、他の3分の2の生徒は日曜学校と同時に週日学校にも在籍していた。日曜学校のみ生徒はウェストミンスターにおける全生徒のうちの11.7%を占めるにすぎない。このことは、既に本稿第2節で触れた如く、他の地域に比較してきわめて低い比率であることがわかる(第5表参照)。

日曜学校での1校当りの生徒数と教員数は他の各種の学校に比して多く、しかも、教師は無料奉仕であり、教育は聖書の一部分を読むことに主力が注がれた<sup>(72)</sup>。生徒の出席状況は悪く<sup>(73)</sup>、しかも1週間に1日だけの授業であり平均3時間程度しか教育が行なわれるにすぎない<sup>(74)</sup>日曜学校において教育効果をあまり期待しえなかったのは当然であった。

## V

最後に、以上の論述から次の諸点を指摘しておこう。

第1に、イギリスにおいては、民衆のための初等教育機関と特権階級のための中等・高等教育機関との間に深い溝が存在し、いわゆる「複線型の教育」が行なわれていたが、民衆の初等教育の内部に階層が生じていることに注目せねばならない。両親の経済状態その他によって、児童の通学する学校の種類がきまってくるのである。このことは、複線型の教育を克服する過程に大きく影響を及ぼしたと考えられる。<sup>(76)</sup>

第2に、ボランティア主義の教育の主力は量的にも質的にも私営学校であった。授業料の徴収を直接の目的としない学校に対して下層の人々をはむしろ反発すら感じていた<sup>(77)</sup>。そして、このような私営学校を支えた民衆の精神は、一方では公教育制度の成立を要求する方向と他方では公教育制度の成立を遅らせる方向へとむかったのである。

第3に、ボランティア主義の教育はいずれも不十分なものでしかなかった。ウェストミンスターの各種の学校の諸状態はマンチェスターやリヴァプールに比較して若干良好ではあるが、そこでの教育が十分なものであるとは言えない。このことを第1報告書は率直に

(72) *First Report*, p. 28; *Second Report*, p. 203.

(73) *First Report*, p. 71.

(74) *Ibid.*, p. 28; *Second Report*, p. 214; *Third Report*, p. 466.

(75) 成田克矢, 前掲書, 参照。長いあいだイギリスの教育は「少数のための中等教育と多数のための初等教育という」「二つの国に分かれていた」のである (W. O. レスター・ミス著, 周郷博訳『教育入門』, 岩波書店, 昭和33年, p. 183)。

(76) 民衆教育内部に階層が生じており、この階層間を上昇したり、民衆教育の上層部から特権の中等教育への上昇するという、いわゆる社会的対流現象が単線型の教育の出現を遅らせる要因の一つになったと考えられる。

(77) *Third Report*, p. 458.

19世紀前半のロンドンにおける民衆教育に関する一考察

認めている。<sup>(78)</sup>ここから民衆教育改善の具体策として教育への国家の介入がはっきりとい  
かびあがってくるのである。ただし、<sup>(79)</sup>国家の教育への介入、とりわけ民衆教育への介入が  
いかなる意図のもとに行なわれたのか、という問題は慎重に検討されねばならないだろう。  
この点に関する三好信浩氏の詳細な論述は、今後の筆者の研究にとって大きな指針となる  
ことを記しておきたい。

(1969年8月13日、信州・中川にて)

---

(78) *First Report*, pp. 32~33.

(79) 1840年代に入ると直ちに国家が教育に介入したということを行っているのではない。  
むしろ国家介入に反対する勢力の方が強力であったため公教育制度の成立が遅れ進展しな  
かったのである。